

パルス（ばるす、英：Pulse）

【解剖】

パルスは、拍動のことをいう。動脈の拍動は、主に心臓の拍動によって起こる動脈内の血液の圧力が変動することから起きる。

体表から簡単に触知可能な動脈は、浅側頭動脈、顔面動脈、総頸動脈、上腕動脈、橈骨動脈、大腿動脈、膝窩動脈、後脛骨動脈、足背動脈などがある。

心拍や血圧を診るのは、ある意味では西洋医学的な脈診とも言える。

また、血液検査でも様々な状況を判断することも、現代医学では重要な診断方法である。

【東洋医学的見解】

脈診は、東洋医学では古くから切診と呼ばれるクライアントに直接触って行う診断方法の中でも、最も重要とされる。

手首の脈を感じて、五行六腑、経絡の陰陽虚実のバランスを比べる診断方法である。

この診断方法には、三部丸候診、脈状診、祖脈診、六部定位診など中国、日本、台湾、チベットなどに多くの診断方法がある。

インドのアユルベーダや古代アラブや古代ギリシャのユナニ医学でも、脈診は重要な診断方法である。

脈診に通じるには、大変な量の経験と良質な指導が必要であるが、同じ脈を診ていても、診断が一緒というわけではない。

チネイザンでは、パルスを感じて診断するという事は行っていない。「脈を感じて、同調する」ということに徹している。

脈が単に身体的な状況を表しているだけではなく、心の状態や生活や社会環境、遺伝などにも関係していることは確かである。

【手技】

1. 脈を感じる。

クライアントの両手首の動脈を感じられる場所に、人差し指、中指、薬指の三本を当て。決して押すのではなく軽く当てるのが大切である。（図1b）

クライアントの両手をクライアントのお腹におく。クライアントの右手を施術者の左手で、クライアントの左手を施術者の右手で脈を感じる方法が楽な姿勢。しかしこれに限らずお互いに楽な姿勢であることが大切。（図1a）

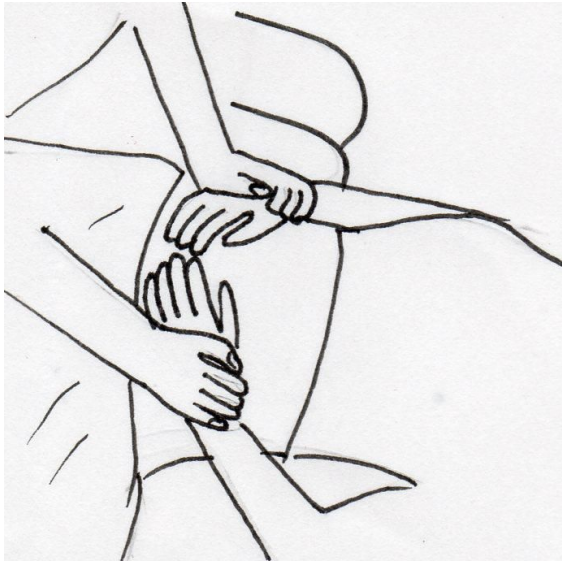


図1a

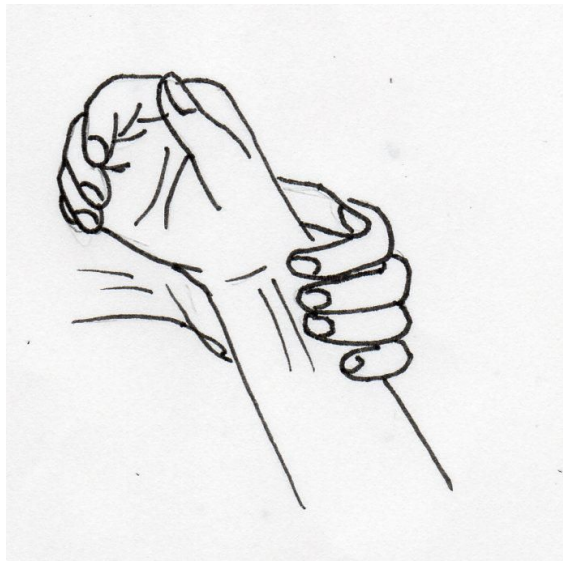


図1b

(両手の脈を感じると、左右の脈の強さ、深さ、リズムが多少違うように感じることが多い。

医学的には、動脈の位置や深さは違うが、リズムや強さが手でわかるくらいに違うことは、かなり稀であり、そういう状態だと危険な状況だと考えられている。

しかし、違いを実際を感じるが多いのは、それが施術者の感覚の問題かもしれないし、クライアントとの関係で起きることなのかは判断しにくいですが、この脈の違いを使っただけの施術法は伝統的な方法としては珍しくはない。)

2. 左右の脈を同調する。

自分の脈を感じながら、クライアントの左右の脈の強さやリズムを同じになるように思う。しばらくすると不思議にも同調してくる。

無理矢理に同じにしようとするのではなく、思うだけで観察し続けることが大切。10秒くらいしても同調しない場合には、そのままが良い。

3. クライアントと施術者の脈を同調する。

自分の脈とクライアントの脈が繋がるように意識する。

二人の脈が全く同じになる必要はないが、意識して触っていると、自然に同調してくるのが分かる。ちょうど二人がダンスするような同調だと言える。

そうすると、何か深いリラクセス感と一体感を実感する。

4. 一体空間と一体時間を味わう。

そのまま5秒ほど、全身全気で味わう。

チネイザンが大切にしているクライアントと同じ空間、時間を共有し、できるだけ保持することに有効。(図2)

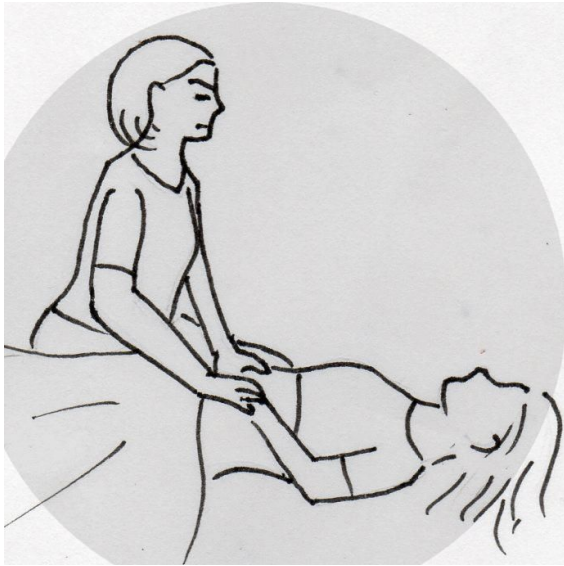


図2

【レベルアップの施術法】

手首だけではなく鼠径、首、足首などで有効。ゆくゆくは、左右だけではなく、任意の二点でも可能。

詳しくは、レベル2応用編で。

最初は、手首で慣れる必要がある。

【期待される変化】

クライアントも施術者も深いリラックスと信頼が生まれる。

さらに深い潜在意識、潜在身体へ広がっていく。

心のざわつきが落ち着く。

【注意点】

頭で一体感を作ることは避け、自然にクライアントと施術者の空間に一体感が起きるのを待つ。できない時には、そのままにしておく。後で一体感が沸き起こることもあるし、できない時もある。

施術の中で多くても2回にとどめる。

心へのアプローチの前後に行っても効果的である。あるいは施術の前半に行うことも効果的。